

## (145) 栃木県日光市の中三依鉾山

この鉾山は、参考文献(1)、(2)に紹介されていた。特に、(2)に添付されていた塩原図幅中には、明瞭に中三依鉾山の名前入りで鉾山記号が記入されていた。図1中で、右上の赤い×印がその位置である。現地の位置は容易にわかったので、これに従って、探査を行った。が、全く鉾山跡らしい痕跡を見つけることはできなかった。現地は、主要道脇にあり、車を降りて、歩くのは僅か。それなので、片手の指では数えられないほど、現地を再訪した。当然に、次第に探査領域も拡張した。しかし、結果として、何も得られなかった。ただ、この付近には鉾山はなかったのだという確信だけであった。×印位置が間違っている？

が、資料調査中に気になっていた点があった。参考文献(1)中に、現地の様子が記述されている箇所である。「中三依部落から更に県道沿いに約2km北上すれば、男鹿川の東岸に本鉾床は存在する。」この文章中の「2km」を3kmあたりに、「北」を北東に読み替えれば、図幅中の位置とはなる。が、次の文章もある。「鉾床は男鹿川がほぼ南北に流れる部分の東岸に位置する。付近は川の両岸が絶壁となって迫り、一般に地形急峻である。北から第1、第2、第3(いずれも仮称)の3鉾床がある。」この文は、図1中に記した赤×印の位置と全く合致していないのは、読者にも直ぐ理解できよう。どちらが本当なのか？

岩友から、中三依鉾山か三依鉾山探査の誘いがあった。お互いに過去の探査と資料を読みこなし、参考文献(1)の方を信用して(部分的には合致しない箇所もあったが)、中三依鉾山を探査をしようということになった。図1中の野岩鉄道の三依山トンネル南側出口のあたりである。中三依駅前に早朝集合とした。非常に天気が良く、駅前広場には紅葉し、落ち葉を撒き散らしている立派な銀杏の木があった。今日の予定の再打ち合わせをしている時、この付近の古老らしい人が散歩に来た。話をしてみると、ここ生まれの住民で、小さい時、鉾山所に遊びに行っていたとのこと。直ぐそこなので、案内しましょうとの好意もいただいた。車に同乗して貰い、現地付近の県道から、男鹿川の東岸の2箇所を教えて貰った。感謝、感謝。更に、古老の話では「四角い」石を拾ったことがあるとか。多分大きめの単結晶であったと思う。羨ましい。

探査場所が決まったので、駅前から、図1中のPの所に車を駐車させた。駐車場から、歩行探査開始。男鹿川に架かっている立派な橋を渡り、直ぐに川に沿って南下した。実は、このあたりは、先の探査行では、歩き回っていた。少しの距離を南下していき、河床水準に近い所で、坑口跡を見つけた。結果論であるが、前回までの探査行で、もう数十メートル南下していれば、この坑口跡に辿り着いていたはずであった。図1中の上の黄緑丸。写真1参照。対岸の県道は目の前である。県道上からライダーが、怪訝そうに私達を見ていた。

さらに南下し、トンネルの出口の先、河床から結構高い所に別の坑口跡を確認した。図1中の下の黄緑丸。写真4を参照。目の前の鉄橋を電車が通過していく。結構頻繁にである。

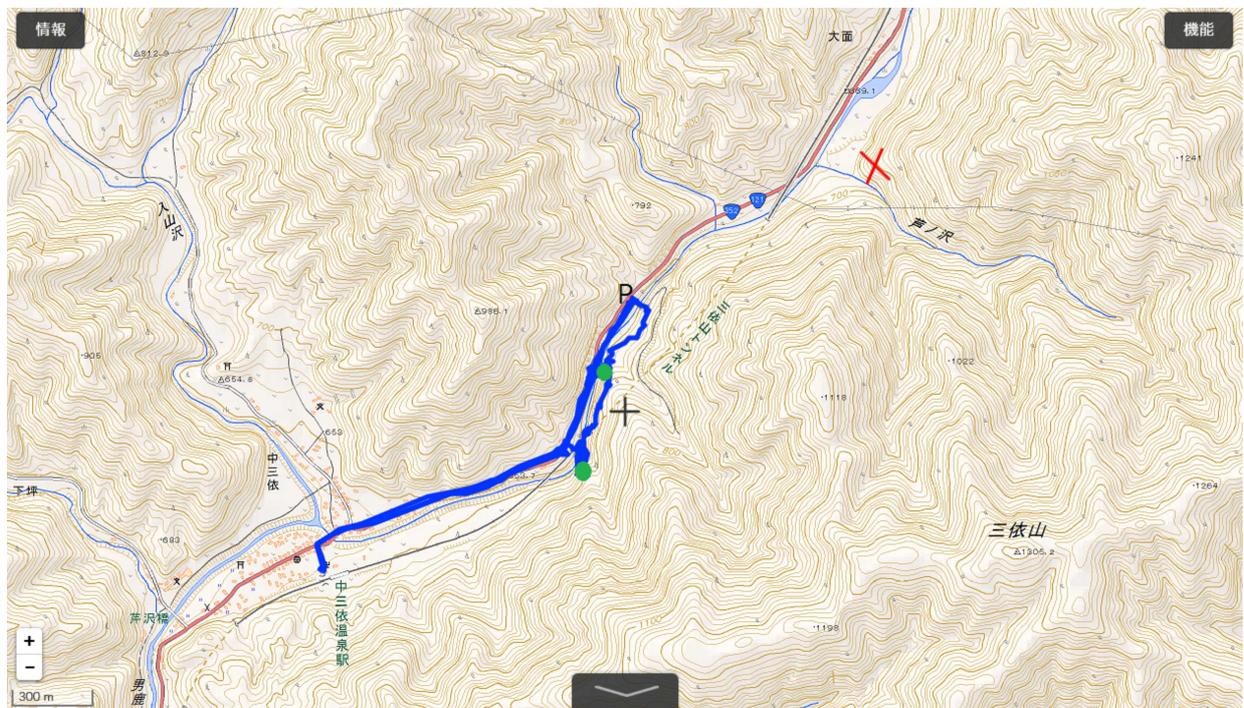


図1 中三依駅前に集合し、その後、県道を北東方向に進んでいくと、除雪車の倉庫らしい建物は右側にあり、その前には十分な空き地がある。P点。男鹿川を渡る橋もある。そこから男鹿川左岸を南下し、2箇所で見つけた坑口跡、及び鉾石標本を採集。黄緑丸が坑口跡。青色曲線がガーミンによる測地データ曲線である。

文献(2)の塩原図幅中に記されていた中三依鉱山記号の位置は全くの間違いと判断した。又、文献(1)から引用した文章は次のように訂正をする必要がある。「中三依部落から更に県道沿いに約1.0km～1.5km北東に進めば・・・」。今回の探査で、文献で紹介されている3鉱床のうちの2つを確認できたと考えている。もう1つの鉱床は？ 多分2つの鉱床の間にあると予想するが、次回を期待したい。現地の近傍の男鹿川の両岸は結構険しく、かつ水量が少なくは無かった。水量が少ない時に、河床を歩行できれば、十分な探査ができると思う。いい露頭脈を観察できそうである。

探査日 2015年11月5日、その他

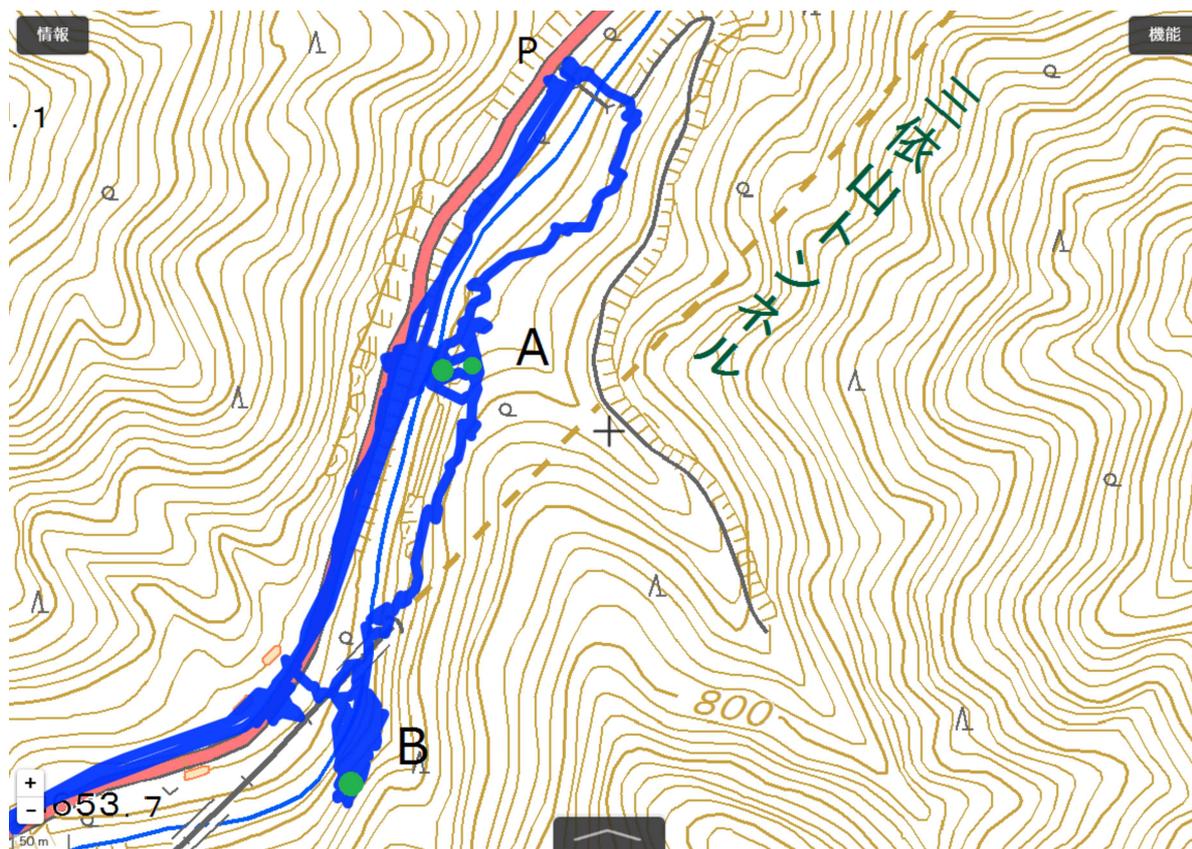


図2 図1の部分拡大図。橋を渡り川に沿って南下していくと、河床水準に閉塞された坑口跡を見つけた。Aの所の左側の黄緑丸。周りは石灰岩の変質岩であるスカルンである。周りには、鉱物に富んだ露頭脈がある。スカルンの良い観察ができる。この坑口の少し上方に、ほぼ潰れてしまったらしい坑口跡も見つけた。右側の黄緑丸。その後、水量が少なくは無く、水に濡れるのもいやだったので、河床での下りは無理と判断し、山腹を南下した。トンネルの南側出口を過ぎた先に、プラトーがあり、坑口跡があった。Bの位置。河床から10m～20mの高さか。帰りは、鉄橋の立派な側道の歩道を経由し、県道に戻った。AとBの2箇所で見つけた坑口跡を確認したが、文献によれば、もっと坑口があった。男鹿川の渇水期か、長めの長靴、或いは水に濡れるのをいとわずに、男鹿川河床沿いに、この付近を探査をすれば、何かを得られるかもしれない。

## 鉋山跡写真



写真1 中央に閉塞された坑口が見える。付近の石を利用して閉じられているので少し分かり難いかも。周りの岩で露頭鉋脈が観察できる。



写真2 坑口跡の右側で観察した露頭鉋脈の一部。この付近一帯に鉋脈がある。が、急峻な岸壁となっており、川の水量が少なければ、或いは滞れるのを覚悟すれば、沢床からも観察できよう。



写真3 写真1の坑口の上方に、潰れかかった坑口跡があった。直に完全に消えてしまうであろう。



写真4 トンネルの南出口側にあった坑口跡。中央の黒い部分。周りはプラトー。右に岩友。手前の木の太さが、鉤山が捨てられてからの年月を示しているはず。大分太い。数十年ではきかない



写真5 写真4の坑口に接近しての一葉。非常に広い坑口であったようである。竹のように見えるのは、どうも削岩機のビットに見えたが。



写真6 三依山トンネル南側出口前の鉄橋。側道として立派な歩道がとりついている。ここで、トンネルに向かって右側に坑口があった。このトンネル開削時には、鉤脈にあったはずと思う。その切り出しズリが、路床のどこかにあるのでは？



写真7 写真1で示した坑口跡前で、後側となる県道方向を見た。立派な垂直の石垣の上が県道。古老の話では、写真を撮っている所の対岸に、即ち、県道の所に、かつて鉦山事務所があったそうである。県道拡幅で消えたとか。

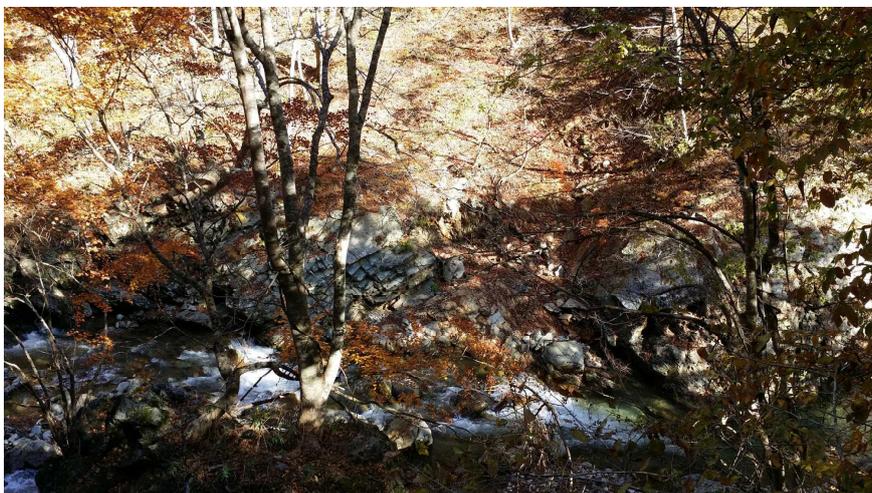


写真8 帰路途中の県道から、写真1で示している坑口跡を見ている。中央部に坑口があるが、周りの景色に溶け込んでおり、通人で無ければわからないかも。簡単に言えば、県道のここから坑口跡に行けるはずなのだが、垂直の高い擁壁と、川の水量が、それを困難にしている。写真を撮っている位置に昔は鉦山施設があったとか。県道の拡幅で消滅した。地形状況から納得した。

## 採集鉦物写真



写真9 Aの坑口跡で採集した標本。黄鉄鉦粒が散在している。



写真10 Bの坑口跡のプラトーで採集した標本。方鉛鉱に富んでいる。

参考文献

- (1)「栃木県塩谷郡三依・塩原地区地下資源調査報告」、通産省技官 梅本悟、郷原範造、1953年。
- (2)「塩原図幅地質説明書」、通産省技官 岩生周一、今井均、昭和30年。



付録 中三依駅前広場での紅葉し、落葉中の見事な1本銀杏。